

ヨハネによる福音書

シリーズ～新約聖書入門～
広島弁訳新約聖書

ヨハネによる福音書の著作経緯

* 情報源は「イエスの愛しておられた弟子」

* 「ペトロが振り向くと、**イエスの愛しておられた弟子**がついて来るのが見えた。この弟子は、あの夕食のとき、イエスの胸もとに寄りかかったまま、『主よ、裏切るのはだれですか』と言った人である。」21:20

* この福音を受け継いだ人たちがいた

* 「これらのことについて証しをし、それを書いたのは、この弟子である。**わたしたちは、彼の証しが真実であることを知っている。**」21:24

この福音書の目的

「このほかにも、イエスは弟子たちの前で、多くのしるしをなさしたが、それはこの書物に書かれていない。これらのことが書かれたのは、あなたがたが、**イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。**」20:30,31

哲学的・神学的福音書

* 創世記を連想させる冒頭

- * “**ロゴス(英知)**”として描かれる受肉前のイエス様
＞イエス様を明確に“神(創造主)”としている

* 他の3つの福音書との違い

- * 共通するエピソードが少ない
 - * たとえ話はほとんどない
- * 奇跡や癒しはイエス様が神である“**しるし**”として描かれる
- * イエス様のお話し(自己解説)が長い

ヨハネによる福音書

～堀川寛による広島弁訳～

(広島弁訳の意味) (訳者の解説・蛇足)

第3章

さて、ファリサイ派(ユダヤ教の最も厳格な派閥)に属する、ニコデモ言う人がおった。ユダヤの国会議員でもあった立派な人じゃった。

ある晩、そのニコデモが(こっそり)イエス様を訪ねてきて言うた。「先生、わしらは、あんたが神様のもとから来られた教師じゃ思うとります。そうでなければ(そうでなければ)、あんたのしとって(なまってる)ような奇跡は、だれにもできやせんです。」イエス様は答えて言うちゃった。「よう聞きんさいよ。人は、新しゅう生まれ変わらんにゃあ、神様の国を見ることはできん。」ニコデモは答えた。「歳をとったもの(者)が、どがあにして(どのようにして)生まれ変わらええんですか?もう一回母親の胎内に入れ言うてんですか。」イエス様は答えられた。「よう聞きんさいよ。だれでも、水(バプテスマ)と霊(聖霊)によって生まれ変わらんにゃあ、神様の国に入ることはできん。(死ぬべき)肉体が生まれ変わったとしてもあくまでも(死ぬべき)肉体のままじゃ。霊によって生まれ変わったら(永遠の命を生きる)霊の人となることができる。(“新しく生まれる”という意味は、イエス様を信じてバプテスマを受け、聖霊によって新たなる霊に生まれ変わらせていただくことである)『あんたらは新しゅう生まれ変わらんにゃいけん』言うたことに、たまげたら(驚いては)いけんで。風は好きなように吹きよう。あんたはその音を聞いても、それがどっから来て、どこへ行くんか知らんじやろう。霊によって生まれたもん(者)も同じよ。(自分でもよく分らないうちに聖霊が生まれ変わらせて下さる)ニコデモはたちまち(即座に)反論した、「なして(どうして)、そがいな(そのような)ことがありえましようか。」イエス様は答えられた。「あんたはイスラエルの教師じゃのに、こがいな(このような)ことも分からんのか。よう聞きんさいよ。わしらは知つとることを語り、見たことを証言しよるのに、あんたらはわしらの証言を受け入れようとはせん。わしが地についてことを話しても信じられんのかなら、どうして天につ

いてことを話して信じることができようか。天についてことが分かるんは、天から降ってきた人の子(イエス様御自身を時々こう呼ばれます)だけじゃ。ほいじゃが、モーセが(疫病からイスラエルの民を救うために青銅の)蛇を作って上げたように、人の子も上げられにゃあいけん(十字架刑の予告)。そりゃあもう。信じるもん(者)が皆、人の子によって永遠の命を得るためじゃ。」

<ここからは福音書著者の解説>

神様はわしらを大切に思うあまり、たった一人の大事な御子(イエス様)を与えて下さった。その御子を信じるもんは誰一人滅ぼされず、永遠の命を得るためじゃ。神様が御子をわしらに送って下さったんはのう、わしらを裁くためじゃのうて、御子によってわしらが救われるためじゃ。御子を信じるもんは裁きを免れる。信じんもんははあ(既に)裁かれとる。神様の独り子を信じとらんからじゃ。光(である御子)がこの世に来たのに、この世のもんらは(人々は)光に行かんと(行かないで)闇にこもったままじゃった。わりい(悪い)ことをしよったけえじゃ。わりいことをするもんは、光を避ける。光に近づいてその行いが明るみに出されるのを恐れるからじゃ。ほいじゃが、真理を行うもんは光の方に来るでえ。その行いが神様にあつてなされたことが明らかになるからじゃ。

その後、イエス様は弟子たちとユダヤ地方に行き、そこにとどまってバプテスマを授けよっちゃった。(バプテスマの)ヨハネも、サリムの近くのアイノンでバプテスマを授けとった。そこらは水がようけえ(たくさん)あつたけえじゃあ。人々は次々にやってきて、バプテスマを受けた。ヨハネはまだ投獄されとらんかったけえじゃ。

ほいじゃがヨハネの弟子たちと、あるユダヤ人らの間で、(律法の規定にある)きよめについて議論が起こった。彼らはヨハネのところへ来て言うた。「先生、あんたが(私より優れた方が来られる)言うた人がバプテスマを授けよってです。みんなはあの人の方へ行きよるが、ええんですか。」ヨハネは答えた。「天から与えられんにゃあ、わしらはなんも受けることはできん。わしは、『自分はメシアじゃない』と言い、『自分はあの方の前に遣わされたもんじゃ』と言うたが、それはあんたらも聞いた通りじゃ。花嫁

を迎えるんは花婿じゃ。わしは花婿じゃのうて介添えに過ぎん。花婿であるイエス様の声が聞こえとるだけで十分なんじゃ。あの方は栄え、わしは衰えにゃあいけん。」

〈ここからは福音書著者の解説〉

上から来ての方は、当然すべてのものの上においてじゃ。地から出たもんは地に属しとるけえ、地のことしか語れん。天から来ての方は、(天のことを語ってじゃ)。この方(イエス様)は、(天で)見たこと、聞いたことを証言してんじゃが、誰もその証言を受け入れようとせん。ほいじゃが、その証言を受け入れたもんは、神様の真理を認めたことになる。神様が遣わしちやっただ方は、神様の言葉を話される。神様が聖霊を惜しみなく与えられるけえじゃ。父なる神様は御子を信頼して、万物をその手にまかしちやっただ(委ねられた)。御子を信じるもんは永遠の命をもらうとるが、御子を無視するもんは、永遠の命をもらえんだけじゃのうて、(御子を遣わした)神様の怒りを頭の上に積むことになる。

第4章

さて、イエス様が(バプテスマの)ヨハネよりようけい(多くの弟子をつくり、洗礼を授けとられるということが、ファリサイ派の耳に入ったと。イエス様はそれを知ると、-洗礼を授けとったんは、イエス様御自身じゃのうて、弟子たちじゃったが-ユダヤを去って、再びガリラヤへ行こうとされた。ほいじゃが、わざわざ(ユダヤ人がきろうとった)サマリア人の土地を通られたんじゃ。

ヤコブがその子ヨセフに与えた地域(パレスチナ入植後にヨセフ属に与えられた土地)にあるシカルというサマリアの町に来られた。そこには“ヤコブの井戸”と呼ばれる井戸があった。イエス様は歩きくたびれて井戸のそばに座とつちやっただ。昼の12時ごろじゃった。そこへ一人のサマリア人の女が(人目を忍んで)水を汲みに来た。イエス様は、「水を飲ませてくれんかのう」言うちやっただ。弟子たちは食べ物を買うたために町へ行って誰もおらんかった。すると、その女は言うた。「ユダヤ人のお方でしょうに、何でサマリア人のうち(私の女性形)に、水を飲ましてくれ、言うてんですか。」当時、ユダヤ人とサマリア人は絶縁状態じゃった。イエス様は答えちやっただ。「も

しあんたが、神様の賜物(である御子)を知とつて、『水を飲ませてくれえ』言うとるのが誰か知とつたら、あんたの方からその人に頼んだじゃろう。ほいでその人はあんたに“生ける水”(湧き水と永遠の命の水、両方の意味)を与えたじゃろう。」女は言うた。「ご主人様。あんたは汲むもん(物)を持とんてんないし、井戸は深いのに、どっからその“生ける水”を手に入れてんですか。あんたは、うちの父ヤコブより偉いいうんですか?ヤコブがこの井戸を掘り当て、自分も、子どもや家畜もこの井戸から水を飲んだんです。」イエス様は答えちやっただ。「この井戸の水を飲むもんはまた渴くじゃろう。ほいじゃが、わしが与える水を飲むもんは二度と渴くことがない。わしが与える水は、その人の内で泉となり、永遠の命に至る水が湧き出てくるけえじゃ(くるのだから)。」

女は言うた。「ご主人様。渴かんようになるために。また、ここへ汲みにこんでもええように、その水をくれんですか。」イエス様が、「あんたの夫をここに呼んできんさい」と言われると、女は、「うちには夫はおりません」言うた。イエス様は言うちやっただ。「『夫はおりません』いうのはもつともじゃ。あんたには5人夫があつたが、今の連れ合いはホンマの夫じゃあない。あんたは正直な女じゃ。」女は言うた。「ご主人様。あなた様はもしかして預言者ですか。(ほいなら聞きますが)、うちの先祖はこの山(ゲリジム山)こそが礼拝すべき場所じゃ言うとりますが、あんたらはエルサレムじゃ言うてです。」イエス様は言うちやっただ。「女よ、わし(の言うことを)を信じんさい。やがて、この山でもエルサレムでもない所で、父(なる神様)を礼拝する時が来るんで。あんたら(サマリア人)は知らんもんを拝みよる。わしら(ユダヤ人)は知つとるもんを拝みよる。救いはユダヤ人から始まるけえじゃ。ほいじゃが、ほんまに礼拝するもんが、(人間の本質である)霊と真心を持って父(なる神様)を礼拝する時が来る。今がその時じゃ。父はそういう礼拝者を求めとつてじゃ。神様は霊じゃ。じゃけえ、神様を礼拝するもんは、霊と真心をもって礼拝せにゃあいけんのんじゃ。」女は言うた。「うちは、救い主と呼ばれるメシアが来られることは知つとります。その方が来られたときに、うちに一切切切知らせ下さるはずです。」イエス様は言うちやっただ。「あんたと話しとるこのわしがメシアじゃ。」

(この女は5度も結婚に失敗した自身の不遇を嘆き、どこに行けば自分の祈りが神に届くのか、とイエス様に尋ねたのである。しかしイエス様は、大切なのは場所ではなく、真心から神を求める心だ、と言い、この女にはそれがある、と見抜かれたのである)

ちょうどそんなとき、弟子らが帰ってきて、イエス様が見知らん女としゃべりよっちゃたのを不思議に思うた。ほいじゃが誰も、「何か要るもんがありますか」とか、「何をしゃべりよっちゃたんですか」言うて尋ねるもんはおらんかった。

一方女は、水がめを井戸のそばに置きっぱなしにして、町へ行き、(あいとうなかつたはずの)町の人々に言うた。「はよう来てみんなさい!うちがやったことをみな(全部)言い当てた人がおってんよ。この人が救い主かもしれんよ!」

(自分の内面を[良い所も悪い所も]見抜かれた女は、自分が人々にどう見られるか気にならなくなり、この偉大な預言者?イエス様のことを知らせるために町へ走ったのである)

人々はぞくぞくとイエス様のところへやって来た。その様子を見ながら、弟子たちが、「先生、何か食べてつかあさい」言うと、イエス様は、「わたしにはあんたらの知らん食べもんがあるんでえ」言うちやうった。弟子たちは、「誰か他のもんが食いもんをもってきたんかいのう」言うて互いに言いおうた。」イエス様は言うちやうった。「わしの食べもんいうんはのう、わしを遣わされた方のご意志を実行して、その業を完成させることじゃ。あんたらは、『刈り入れまでまだ4ヶ月もある』言いよるが、わしやあ言うとくでえ。よう目開けて見てみんなさい。はあ(既に)色づいて刈り入れを待っとる。(サマリア人が救われるのはまだ全然先のことだと思ったら大間違いだ)収穫のために雇われたもんらは永遠の命の実を集めよる。種を蒔いたもん(旧約聖書の人々)も、刈り入れるもんも、一緒に喜ぶんよ。『一人が種を蒔き、別の人刈り入れる』いうことわざがあるじゃろう。あんたらは自分ではなんもたいぎい(苦勞)思いをせんかったのに、刈り入れの場につれてきてやったんじゃ。ええとこだけやらしてもろうとることを忘れちゃいけんでえ。」

この町の多くのサマリア人は、「この方が、うちのやったことをみな言い当てちゃった」という女の言葉によって、イエス様を信じた。ほいで、このサマリア

人らはイエス様のところにやって来て、自分らのところにおって下さい、いうて頼んだ。イエス様は2日間そこにおっちゃった。そしたら、更にようけえ(多く)の人らが、イエス様の話しを聞いて信じた。彼らは女に言うた。「わしらが信じるんは、あんたの話しを聞いたけえじゃない。直接イエス様の話を聞いて、このお方こそ世の救い主に違いないと分かったけえじゃ。」

2日間サマリアに滞在しての地、イエス様はガリラヤにむこうちやうった。イエス様は自分から、「預言者いうんは生まれ故郷じゃあ敬われんもんじゃ。」言うちやうったことがあつた。

ところがガリラヤに着かれると、ガリラヤの人らはイエス様を歓迎した。彼らも祭りに行ったおりに、イエス様がエルサレムでしよっちゃった奇跡を見たけえじゃ。イエス様は、前に水をぶどう酒に変えたガリラヤのカナいう町に行っちゃった。ところが、カファルナウムに王の役人がおって、その息子が病気じゃうた。こんなは(この人ば)、イエス様がユダヤからガリラヤに戻られたと聞いて、イエス様のところへ来て、カファルナウムまで来て息子を治してくれるように頼んだ(約一日の道のり)。息子が死にかかるとつたけえじゃ。イエス様は役人に、「あんたは、証拠と奇跡を見んにやあ、わしを信じりやせん。」言われた。役人は、「ご主人様。頼みますけえ、うちの子が死なんうちに来てつかあさい(下さい)」言うた。イエス様は言うちやうった。「帰りんさい!あんたの息子は元気になった。」役人はイエス様の言葉を信じて帰ったんと。ほしたらどうねえ。帰りよる途中に、召使いらが迎えに来て、その子が元気になった、言うたんよ。ほいで、息子の病気が良うなった時間を尋ねると、召使いらは、「きによう(昨日)の昼の1時頃、熱が一気に下がったんです」言うた。それは、イエス様が「あんたの息子は元気になった」言うちやうったんと同じ時間じゃうた。それを知って、役人は家族もろともイエス様を信じたんと。これは、イエス様がユダヤからガリラヤに戻られてから、2回目の(神の子である)証拠じゃうた。

第5章

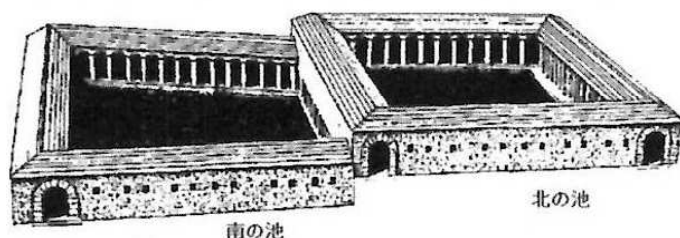
しばらくして、ユダヤ人の祭りがあつたんで、イエ

ス様はエルサレムに上られたんじゃ。エルサレムには羊の門のねき(そば)へ、ヘブライ語で「ベトザタ(“オリーブの家”の意)」呼ばれよる池があって、5つの回廊が囲んどった。この回廊には、病気の人やら、目の見えん人、足の不自由な人、体の麻痺した人なんかがようけい(大勢)横になっとった。このもんらは(この人たちは)、水がいごく(動く)んを待とったんよ。なんでか言うと、天使が時々池に降りてきて、水を動かすんじゃが、動いた水に最初に入ったもんは、どんな病気も治ったけえじゃ。(もちろん迷信)

そこに、何と38年も病気で苦しんどるもんがおった。イエス様は、その人が長いこと横になっとるんを知って、「ようになりたいか」言うちやっした。その病人は、「ご主人様。水がいごいた(動いた)ときに、わしを池ん中に入れてくれる人がおらんのです。わしが行こう思ううちに、他のもんが先に行ってしまうんです」と答えた。イエス様は言うちやっした。「起き上がりんさい。寝床を担いで歩きんさい。」ほしたら、そんなはたちまち(すぐに)ようなって(良くなって)、寝床を担いで歩き出したんよ。ところが、その日は安息日じゃった。そこで、ユダヤ人らは病気を治してもらったもんに言うた。「今日は安息日じゃけえ、寝床を担ぐことはでけん(できない)。律法で許されてとらん。」ほいじゃが、その人は、「わしを治してくれちやっしたお方が、『寝床を担いで歩きんさい』言うちやっしたんです」と答えた。ユダヤ人らは、「誰がそがいなことを(そのようなこと)言うたんなら」いうて責めた。病気を治してもろうたもんは、治してくれたんが誰なんか知らんかった。イエス様が、群衆に紛れておらんようになったけえじゃ。

ちいとしてから(少し経ってから)、イエス様は、神殿の境内で(歩いて)いたこの男を見つけ出して言うちやっした。「あんたの病気はようなった(良くなった)。これからは罪を犯しちやあいけんで。もっとわりい(悪い)ことが起こらんようにのう。」この男は立ち去って、自分を治したんはイエス様じゃいうて、ユダヤ人らに知らせた。それを知ってユダヤ人らは、イエス様を追求した。イエス様が、安息日に病人を治したけえじゃ。イエス様は言うちやっした。「わしのお父様(天の父なる神様)は24時間働きよってじゃ。わしが働くんは当然のことじゃ。」それを聞いてユダヤ

人らは、イエス様を殺しちやろうと、ひどうに(更に激しく)狙うようになった。イエス様が安息日を破っただけじゃのうて、神様を父と呼んで、まるで自分を神様と同等であるかのように言うちやっしたけえじゃ。



ベトザタの池